



プロジェクトの目的および研究計画

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の構想

福田 アジオ (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授)

1 人類諸文化を相対的にとらえる計画

このほど21世紀COEプログラムの学際・複合・新領域の分野で採択された私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、申請者自ら言うのはおこがましいが、現代の研究課題に取り組むものであり、今後の人類文化研究に大きく貢献する計画である。

私たちの日常生活を考え、その意味を明らかにしようとするときに、文字に頼れないことは明らかである。毎日の生活の中で、文字化されたり、文字で記録されたりすることがいかに少ないかは、自分自身の生活を振り返ってもすぐ分かることである。自分史を記述しようとしたときに、旧来の方法に頼って記述しようすると、実に味気ないものになり、また行き詰まってしまう。そして、自分の人生の中で重要な意味を持ったことが文字にはほとんど記録されていないことを痛感するであろう。人々間のコミュニケーションも文字を介さずに行われることがいかに多いことか。それにもかかわらず、人々は文字に縛られ、特に文化の研究は文字に記されたものだけに価値を置く傾向が強い。しかし、文字に記録されることのない人間の行為や知識あるいは観念の方がはるかに膨大であり、多様である。今まで十分に資料化されることがなかった人間活動の文字化されない部分を対象とし、その資料化の方法を開発し、各種資料を総合し、体系化することを構想して、研究計画が作られた。

現在、世界的規模で文化の相互理解が強く求められている。自文化中心の独断的独善的思考が各地で多くの悲劇を生み出している。自他の文化を対等に認識し、理解することが世界各地での悲劇をなくす一つの道である。非文字資料の体系化によって、特定社会を背景とした文字から解放され、それぞれの文化を当事者の立場に立って内側から把握し、真に相対的に理解することを可能にする。この計画は、日本の研究から出発しているが、その特殊性や特異性を主張して日本を絶対的な存在にせず、東アジアの中で、さらには世界の中で理解しようとする。そして技術を進化させた人間と自然・環境との相互作用

を把握しようとする。さらに、身体技法・感性あるいは環境に刻まれた災害や人間活動の痕跡等を体系的に記録・収集・整理することで、人類文化研究のための共通財産を作り出そうとする。こうした資料の体系化は方法的に普遍性を持ち、国際的な研究者のネットワーク形成を可能にし、国際的に貢献することになると信じている。

昨年度から始まった21世紀COEプログラムに対して、初年度は諸般の事情で申請を見送った大学院歴史民俗資料学研究科では、昨年秋に2年度目に申請をすることを決めて準備に入った。歴史民俗資料学研究科の研究教育は、文字資料と非文字資料の両者を対等に位置づけることを基本的理念としてきた。しかし、文字資料についてはすでに膨大な研究蓄積が学内外にあり、世界的にも研究が進展している。それに対して、文字に表現されない人間の様々な行為、思考を資料化する方法は必ずしも開発されてこなかった。文字によって表現されたものに価値を見いだす考えが人々を縛っていたのである。私たちの計画は歴史民俗資料学研究科の2本柱のうち敢えて後者の非文字資料に絞り、研究計画を立てた。その意味は、上述のような、地球上の様々な人々の生活を対等平等に認識することを可能にする資料の獲得を目指すからである。これは今日の新しい学問に要求される重要な課題であると認識している。

2 研究蓄積を活かしたプログラム

私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は手品のように全くの無から有を作り出す計画ではない。私たちの先輩や私たち自身が蓄積してきた研究やその基礎にある資料化の方法を前提にしている。そもそも大学院歴史民俗資料学研究科が基礎学部をもたない研究科として10年前に開設されたのは、その前提として神奈川大学に付置された日本常民文化研究所(常民研)の存在があった。常民研はアチックミュージアムとして1920年代後半に本格的活動を開始して70年以上の年数が経ち、それが神奈川大学に招致されてからでも20年が経過している。



アチックミュージアムの群像（収集資料を身につけて、後列中央が
渋沢敬三、1937年）
神奈川県立日本常民文化研究所蔵

日本常民文化研究所はその80年近い活動のなかで、日本では数少ない非文字資料の集積と研究を行い、豊富な研究蓄積がある。研究所の創設者渋沢敬三は、当時としては珍しい各地の生活の映画撮影を行い、また写真を撮り、膨大な映像資料を残してくれた。また研究所の事業として、図像の資料化を試み、世界的に見て類のない『絵巻物で見た日本常民生活絵引』を発行した。渋沢敬三の字引ではなく絵引きをという発想で作られたそれは、日本中世に限定されたものであるが、図像が生活文化研究にとってどれほど豊かな資料になるかを示してくれた。また、民具という用語は渋沢敬三によって作られたことが示すように、常民研は日本における民具研究の拠点として存在してきた。現在も『民具マンスリー』を月刊で刊行し、日本の民具研究に大きく貢献している。私たちの計画は、この常民研の研究蓄積を前提にし、それをさらに日本から東アジアへ、そして世界へ発展させることで、常民研の開発し、また蓄積してきた方法や資料を人類文化研究のための共有財産にすることを構想した。

また、常民研の活動蓄積を基礎に設立された歴史民俗資料学研究科も、先に記したように、研究教育の柱をオーソドックスな文字資料と今後の開発を待つ非文字資料の二つにおいている。非文字資料については、表現としては民俗資料学と称しているが、狭い意味での民俗ではなく、文化に近い幅広い概念として捉え、研究教育を行い、僅か10年でありながらすでに少なからぬ研究者を生み出し、専門的職業人も多く出ている。歴史民俗資料学研究科は創設当初から博物館専門職員の再教育を中心とした高度専門職としての学芸員の養成も目標にしている。今回のプログラムにおいては、歴史民俗資料学研究科のこの目標を研究計画に結びつけ、世界的に活躍する若手研究者の養成を目指す実施計画を立てた。

今回の計画は、このような歴史民俗資料学研究科と日本常民文化研究所が一体となって計画し、さらに日本から東アジアへと研究が展開するために東アジア研究で実績をあげている大学院外国語学研究科中国言語文化専攻の参加を求め、また実施に当たっては研究課題にかかわる多くの研究分野の研究者に学内外から参加を求めた。そのために、COE共同研究員を制度化し、20名の事業推進担当者に加えて、学内6名、学外11名の研究者を共同研究員として委嘱し、共に研究に従事して貰い、目的を達成することにした。これも研究実績を基礎に研究を進展させて目標に達するための努力である。

3 四つの研究班で研究推進

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という課題は大きい。限られた5年間で達成できる目標を設定しなければならない。非文字資料の対象を大きく三つに限定して設定した。第一は図像、第二は身体技法・感性、第三は環境と景観である。この三つを柱として、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料で分析をするというものである。そして、重要なことは、第四の柱として、それらの非文字資料を活用し、世界に向かって発信する方法を開発する課題を設定した。これをそれぞれ研究班として編成する。そして、それぞれの研究班には三本の研究課題を設定した。したがって、私たちの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は四つの研究班、12の研究課題によって構成される。そのおおよその計画を示すと以下の通りである。

第1班は図像資料の体系化を課題とする。先に紹介した日本常民文化研究所の誇るべき研究蓄積である『絵巻物による日本常民生活絵引』を国際的に利用可能にするため、本文の英語訳、キャプションの英仏中韓国語訳を付けたマルチ言語版の編集発行をする。『日本常民生活絵引』の対象は中世までであるので、それに次ぐ近世・近代生活絵引きの編さんを行うための資料収集とその解析を行い、5年目にはその刊行を開始する。そして東アジア生活絵引き編さんのための資料収集を行い、データベースを作成し、公開する。

第2班は身体技法と感性の資料化を課題として、ほとんど資料化されることのなかった身体技法を資料として定着させる方法を開発し、諸文化間の比較研究を行う。そのために日本だけでなく、ヨーロッパやアフリカでも調査を行う。次に感性を把握する方法をフランスのアナール学派



の検討を通して明らかにすると共に、その具体的な調査研究を行う。また民具をそれを用いる身体技法との関連で把握する調査を日本各地で実施し、さらに東アジアにおける民俗芸能の所作を身体技法として把握し、分析する。



渋沢フィルム的一枚（鹿児島県大島郡喜界町湾、1935年撮影）
神奈川大学日本常民文化研究所所蔵

第3班は環境と景観の資料化を課題とする。まず、日本常民文化研究所が所蔵する渋沢敬三などが撮影した映像（渋沢フィルム）を分析し、それと現状との比較を通して環境の変化を明らかにする。また人々の環境認識の変化を日本列島各地の民俗調査によって明確にすることで、人間と環境との関係を明らかにする。さらに災害あるいは戦争などが大地に刻印した痕跡を調査把握する方法を開発し、日本各地及び東アジア各地で調査する。

第4班は、文化情報発信の技術開発を課題とする班である。上記三つの研究班の研究成果の上に、新しい情報発信技術の開発を行う。先づ従来の文字資料・非文字資料を含んだ資料の伝存形態の世界的調査を行うと共に、非文字資料の収集・整理・情報化の方法を開発し、種々の試みを通して世界に発信する。この過程で、非文字資料に専ら依拠する博物館学芸員の高度専門職としての確立を目指して、大学院における博物館資料、博物館展示に関する研究教育の方法を開発し実践する。

以上の各班の活動は独立的に行うのではなく、相互に関連させ、互いに刺激しあう形で進める。そのため、研究担当者全体の会議と研究会を頻繁に開催することを計画している。そこでの議論が各班に持ち帰られることで、全体として研究を深めることになる。

4 研究成果とその社会的意義

このプログラムは、四つの班がそれぞれに研究成果をとりまとめると同時に、それらを総合して全体として課題に迫る研究報告書を刊行することを予定している。各

班の成果は、班の対象によって異なり、データベースの作成公開、資料集の刊行、調査報告書の公刊、研究集会や国際シンポジウムの開催とその記録集の公刊、班の課題に応じた論文集の公刊など多くの成果公表を予定している。また4班のように、新たな情報発信方法を博物館展示として試みる。早くも来年度にはその研究成果の一部は姿を見せることになっている。

5年間の研究を経て、歴史民俗資料学研究科を中心として、日本常民文化研究所、中国言語文化専攻は世界的な研究拠点を形成するはずである。この拠点は世界の研究者とのネットワークを形成し、様々な形態の非文字資料を集積し、さらにそれを再編成して世界に提供する非文字資料研究センターとしての役割を果たすことを期している。この5年間はそのための基盤構築の時期と位置づけられている。研究開発だけでなく、データベースの作成にかかわる作業も着実に進め、信頼性の高い情報を世界に提供したいと考えている。研究の途中経過や中間成果としての各種データベースも各種の媒体を通して公開する計画を立てている。

公開の有力な方法は言うまでもなくホームページである。独自のホームページを開発し、プログラムの全体像を示すだけでなく、研究会の記録を掲載し、また作成した各種データを公開する。また、年に4回ニュースレターを発行して、研究調査で得た新知見を速報し、また年度末には年報を発行して、その年度の研究成果をとりまとめて公開する。そして、調査研究に関連する提言や批判を学内外の方々から貰いたいと思っている。ホームページやニュースレターはそのためにも大いに役立つものと思っている。

COEプログラムの大きな目標は、世界的に活躍することができる若手研究者の育成である。私たちのプログラムでもそのための工夫と努力を行うつもりである。制度としては、すでにCOE研究員(PD)とCOE研究員(RA)を設け、実施している。COE研究員(PD)は、博士の学位を取得して未だ研究職に就職していない若手研究者を対象にし、研究員に採用することで、彼等の研究の進展を援助すると共に、私たちのプログラムの研究も深まることを目標としている。私どもの課題に関連する分野では、博士の学位を取得しないで退学することも少なくないので、そのような所定の単位を取得して博士課程を退学した者も採用対象としている。PDは本年度はすでに3名を採用し、10月から勤務している。COE研究員(RA)は研究拠点となる歴史民俗資料学研究科と中国言語文化

専攻の博士後期課程在籍学生をリサーチアシスタントとして採用し、研究業務を補佐してもらい、また本人の研究を指導し支援するものである。本年度は3名の採用を決めている。PDやRAの研究の進展を支援する方策として、課題に応じて海外での調査研究を行うための派遣を計画している。また研究成果を年報その他に発表する機会を設ける。

さらに拠点形成を行う歴史民俗資料学研究科や常民研、あるいは中国言語文化専攻そのものの研究の活発化をCOEプログラムの実施過程で図ることも当然ながら不可欠なことである。COEプログラムは基本的に博士課程（神奈

川大学では博士後期課程）を対象にしているが、長期的な展望に立てば基礎的な足腰を強くすることが不可欠であり、修士課程（神奈川大学では博士前期課程）の研究教育にも一段と工夫をし、全体としてCOEプログラムの拠点に相応しい大学院とすることを考えている。

COEプログラムだけが独立して活動するのではなく、歴史民俗資料学研究科や常民研と一体となって拠点形成を目指し、その実現が神奈川大学の研究基盤の充実なることを期すと共に、非文字資料を主として研究してきた諸学問に大きく貢献することを夢見ている。大方のご支援をお願いしたい。

